

満開 健太の朝顔



小さな家の軒下に、赤紫の朝顔が満開だ。宮城県石巻市の佐藤とも子さん(50)が育てている。植えたのはひとり息子の健太君がとっておいた種。3年前の3月11日、津波で児童の7割が犠牲になった市立大川小学校の3年生だった。残された種はめさめ、花を咲かせた。

東日本大震災が発生した時、学校にいた健太君は、地震後約50分間、教職員らと校庭にとどまり、津波に襲われた。

自宅は無事だった。ともさんは自宅の学習机で紙袋を見つけた。1年生の時に育てた朝顔の種が入っていた。鉛筆で「みらいのじぶんへ」と記してある。その後、ともさんは夫の美広さん(53)と自宅を出た。近所の子らの声を耳にするのもつらく、遠くの借家へ移った。

位牌を置いた祭壇脇に夫妻は布団を並べて休む。祭壇に種の袋も置いた。「俺が先に会いに行くからな」と夫。ともさんは「健太はお母さんが一番な

みらいのじぶんへ—大川小児童が残した種

の。私が先に会いに行くの「み」と言い返していた。

卒業式を迎えるはずだった今年3月。夫妻は、犠牲になった児童22人の保護者とともに、県と市に損害賠償を求める訴訟を仙台地裁に起こした。校舎裏の山に登れば津波を避けられた。校門前のスクールバスで逃げることもできた——。原因を究明し、責任を明らかにすることを望んだ。

5月。第1回口頭弁論の日の朝、ともさんは、袋の種20粒のうち7粒を植え「頑張ると」と誓った。11日後、歓声を上げた。芽が一つ出た。一つだけでは可哀想。さらに4粒まき、また一つだけ芽が出た。

7月。最初の花が開いた朝、夫妻は携帯のカメラに収めた。2本のつるは順につぼみをつける。今も語り始めれば涙が出るが、朝のひとときだけ笑顔がほれる。光の中、やっと立ち上がった両親へ、天からの贈り物のように花は開く。(小野聖美)



◎健太君の朝顔と母のともさんの「みらいのじぶんへ」。母のともさんが手にした健太君の遺影と朝顔の種の袋。いずれも宮城県石巻市